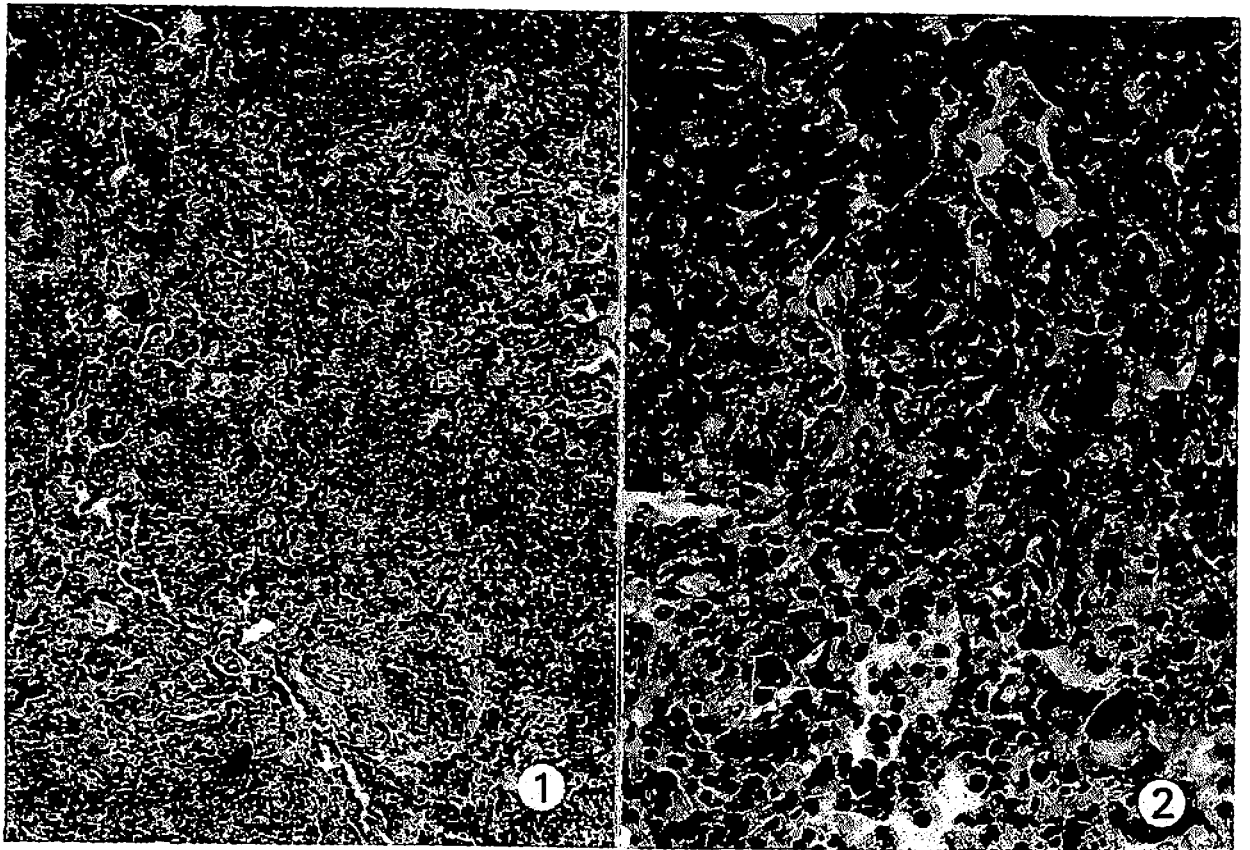


牛の肺

帯広畜産大学家畜病理学教室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.365



動物：牛，ホルスタイン種，雌，11.5歳。

臨床事項：本例は1981年5月1日頃より下痢の症状を発生し，某共済組合家畜診療所で治療を受けた。しかし，好転の兆しなく，同年5月26日に帯広畜産大学家畜病院に入院した。入院時，一般状態は元気なく且つ削瘦し，水瀉性下痢，高度の蛋白尿，直腸検査で腎臓の腫大・硬化を認めた。その他種々の検査を行った結果「類殿粉症」と診断され，予後不良と判定し翌27日放血殺を行い病理解剖を行った。

肉眼所見：1)腎は腫大し，帯褐色で硬度を増す。2)肝の軽度の腫大ならびに微細紋理の形成。3)胃・腸粘膜下組織の水腫。4)胸水および腹水の増量ならびに全身皮下の水腫。5)左肺前葉前部および副葉の一部に巣状肺炎。

組織学的所見：全身諸臓器について検索を行った結果，腎臓，肝臓をはじめ全身諸臓器に類殿粉質の沈着が認められた。

提出した標本は，肉眼的に左肺前葉前部に認めた肺炎病巣の一部で，H・E染色標本である。弱拡大鏡下では病変部は全般にほぼ一様の組織像を呈す。すなわち，肺胞並びに一部の細気管支は水腫と共にリンパ球，形質細胞および巨細胞を伴う大喰細胞を主体とした細胞浸潤によって占められ，その中に微細な粉状異物からなる小さな

集塊が認められる。また一部にはこの異物を中心とした好中球の集簇も散見される（写真1，H・E，×63）。強拡大にすると大喰細胞や巨細胞の細胞質内に微細な異物が取り込まれている像も認められる（写真2，H・E，×250）。提出標本（H・E）での観察は困難であるが，コンゴレッド染色標本では一部の筋型動脈の中膜に類殿粉質の沈着が認められた。

この組織像は微細な粉状異物に対する反応と考えられる。一部には異物を中心に好中球の集簇が認められるが，化膿性という程のこともなく，異物処理に対する大喰細胞や異物巨細胞さらにリンパ球，形質細胞が目立っている。線維化の傾向はこの段階ではみられない。著者らは診断名として塵肺症(pneumoconiosis又はdust pneumonia)としたが，研修会の席上で病巣の広がりについて疑問があり，異物性肺炎と診断された。本例においては，この粉状異物が気道を介して全肺に入ったものではなく，恐らく止瀉剤投与の失宜（一種の誤嚥）によるものと思われる。それ故巣状肺炎の像をとることは当然と考えるが，その組織像は広い意味での異物性肺炎から塵肺症の範疇に入るべきものではないかと心にひっかかるものがある。

組織診断名：異物性肺炎。